

〔新刊紹介〕

大後美保・長尾 隆著 都市気候学

A5版 214頁 朝倉書店

近年、環境問題が脚光を浴びるようになって、都市気候の研究が世界的に盛んになってきた。都市気候の研究は歴史が古く、Kratzerのモノグラフィーの初版が出たのは1937年で、1956年に内容を一新した改版が出ている。わが国ではこれまでこの種の単行本が出ていなかったため、本書の刊行は都市気候学を展望する上に多大の便宜を供した点で時期を得たものといえよう。

内容は序論、都市の日射と日照、都市の気温、都市の

風、都市の湿度、都市の霧と雲、都市の雨と雪、都市の雷雨と降雹、都市再開発と都市気候の9章に分かれている。巻末には著者が都市の気候の主要な文献と考えた、191の文献がリストアップされている。記述の方法は各章ごとに、これらの研究成果を例示し紹介をしながら、論を進めてまとめる形式がとられている。多数の図表が掲載されているので、多種多様の都市気候現象を知るのに便利である。
(河村 武)

ラトクリフ著、関口理郎訳

太陽・地球・電波 (世界大学選書)

(平凡社 昭和47年、234P、550円)

およそ気象学にたずさわっていながら、超高層大気の物理に興味、あるいは少くとも関心を持たぬ人は殆んどあるまい。そこで新聞のはしはし、人の話などで、電離層、ダイナモ領域、磁気圏など超高層に関する事柄をかなりに耳学問されていよう。しかしながら耳学問である限り、知識に自信を持ちうるわけではないし、ざりとてまともに勉強するとなったら、とてもじゃないが片手間でできることではない。

こう感ずる人には是非一読をおすすめしたいのがこの本である。例えば本書の157頁を開いて下さい。そこに載っている図を一眼みただけで、きっと内容を読みたくなるだろうと思う。

太陽・地球・電波といういささかあいまいな表題であるが、太陽地球間のスペースを舞台とした電波のふるまいを調べることによって、このスペースの物理が如何に解き明かされてきたかを述べている。1920年代初期における電波技術の劇的な登場によって、超高層大気は手探りの状態から一挙に幕が上った。かくしてこの研究は第2次大戦後に頂点に達し、後に人工衛星によって電離層は上からの逆探測まで行われるようになる。

研究の発展段階を追って述べるということは、へたをするすと往々にして読者を混乱に落し入れる。昔のことは

どうでもよいから、今の正しい知識を教えてください、そうした読者はいくつかも知れない。しかし本書の場合はそうではない。過去の誤った考え方を述べておくことが、現在の知識を理解させるのに役立つ。そういう計算にもとづいて書かれているのである。

本書の全ききわだった特色の一つ。それは数式を全く用いていないということである。(どうやら著者は意地になってそうしたふしがある。)その代り、絵や図を駆使している。この図にはまた巧妙な説明がつけてあって、それが本文の理解を大いに助ける。

第6章までが本書の主体ではなからうか。数式を一つも使わなかったのにもかかわらず物理内容は十分にたみ込まれている。

第7章、太陽風と磁気圏の話は現在急激な進展をみせている分野であるが、1969年現在の状態を週刊紙的な気安さで読ませる。

一般に翻訳書は文章がまわりくどくて、わかりにくいものであるが、本書の訳は流麗で翻訳書であることを時として忘れさせる。それでもなお、日本人書きおろしの表現とどこがちがうのは、英語と日本語の本質的な差異であろう。(三崎方郎)